http://hokkaido-poland.com/pole.html

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」
第３０号　1995, 5,24

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060　札幌市中央区南２東２
河合楽器製作所北海道支社内
電話　011-231-8661
FAX　011-221-4936

ポーランド感動の旅

―訪問団参加者報告集―

北海道ポーランド文化協会創立以来の懸案だったポーランド訪問が、やっと実現しました。

期間は一九九四年九月五日から十五日までの十一日間です。

訪問団に参加された十三名の方々は、ウッチの日本協会の方々との交流を第一の目的として、他にショパンゆかりの地やアウシュヴィッツをたずねるなど、忘れがたい感動の旅を体験されました。

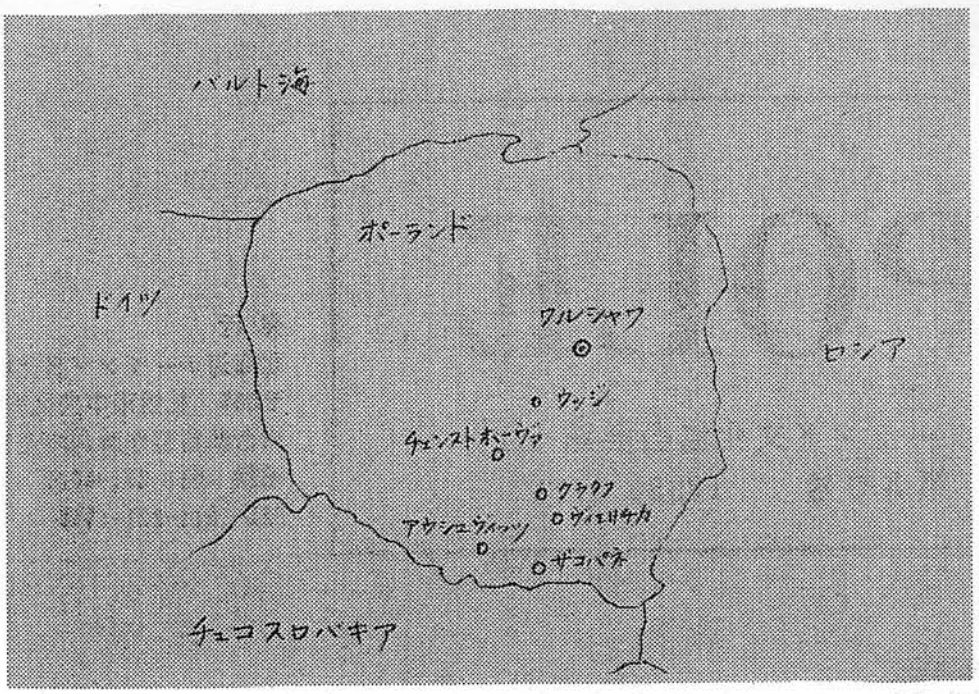
例会としてすでに報告会は開かれましたが、全会員への報告として特集号を作りました。

グダンスク
協会内の“連帯”コーナーで

ヴィエリチカ　地底の塩の町で参加者全員

豪華な顔ぶれのツアー

小笠原　正明



9月5日　成田発、ワルシャワ着
6日　ワルシャワ→ウッジ泊
7日　ウッジ→クラクフ泊
8日　アウシュビッツ、ヴィエリチカ　クラクフ泊
9日　クラクフ→ザコパネ泊
10日　ザコパネ→チェンストホーヴァ
11日　チェンストホーヴァ→ワルシャワ泊
12日　自由行動　ワルシャワ泊
13日　自由行動　ワルシャワ泊
14日　ワルシャワ発
15日　成田着

今回の訪問の第一の目的は、ウッチの日本協会の方々とお会いすることでした。現地の吉田勝一さんのおかげで、なごやかで実りのある交流を行うことができました。手作りの食事を持ち寄ってのパーティーで、ポーランドの方々の真心が直接伝わってくるような雰囲気であったことをまずお伝えしたいと思います。

なお、私はポーランドで開かれた国際学会に参加する途中で、訪問団の方々と一時合流しただけなので、以下は知っている範囲あるいは聞いた範囲での感想です。

旅行そのものは大変「豪華」なものでした。円高とはいえ、航空機代を除いて十万と少しの旅行とは考えられないようなものでした。泊まったホテルはすべて超一流、昼食は訪問した土地の最高級レストラン、夕食は毎晩ヨーロッパ風の時間をかけたフルコース、移動はすべて貸し切りのバス（これには多少問題があったようですが）で、ガイド付き、有名な黒マリアの教会では祭壇のすぐ横に招かれるという歓待ぶりでした。しかし私にとっては、ツアーの参加者の方がもっと豪華に感じられました。ショパンの生家ではピアニストの方々から説明していただき、ウッチでは美術の専門家からアールヌーボーとは何かを教えてもらい、クラコフでは文学の専門家から有名な詩人の話や古書の話を聞きました。また、ウッチから同行してくれた吉田勝一さんから、全体に非常にていねいな説明をしてもらいました。文化と芸術の国ポーランドを旅するのに、このくらい人材のそろったチームは無かったのではないでしょうか。

ところで私は、十四年前の一九八〇年にポーランドにしばらく滞在した経験があります。当時、偶然にもウッチ工科大学のソリダーノシチ（連帯）に一番近い人々と生活を共にしました。生活はとても苦しく、ホテルフォーラムやホテルクラコビア（いずれも今回泊まったホテル）を利用するような人達とはかけ離れた貧乏生活を送ったものです。一度だけ、ワルシャワのホテルフォーラムに泊まりましたが、あまりの生活感覚の違いに倫理的な嫌悪感のようなものを感じて、一泊したあとは友達のポーランド人のアパートにもぐり込んだ覚えがあります。

ポーランドを離れるとき数名の友人から、「君は一番悪いときにこの国に来た、世の中が落ち着いたらぜひもう一度来てこの国を楽しんでくれ」と同じようなことを言われました。今回のツアーに参加して、あの人達の気持ちが今少し分かったような気がします。

大きな歴史を持つ小さな町

栗原 朋友子

一九八二年、コルベ神父の映画『アウシュビッツ愛の奇跡』を私は見る機会を与えられました。「愛とは何か」「戦争と平和」について、それ以来考えるようになりました。

そして今回の北海道ポーランド文化協会の計画されたポーランド旅行に参加させていただき、ポーランド各地を廻ることができ、数々のおもいでが今もアルバムをみるたびによみがえります。その中でもコルベ神父の足跡をたどるかのような今回の旅は忘れることができません。

ショパンの生家、ジェラゾヴァ・ヴォーラーを訪ねるためにワルシャワから西に向かってまっすぐ国道を訪問団を乗せたマイクロバスは走り、のどかな田園風景の中を42キロほど行った時、国道を左に囲り、いちだんと美しい秋のポプラの並木道に入りました。ポーランドの地図に地名も位置も載っていない小さい町、ニェポカラノフ(NIEPOKALANOW)につきました。

このニェポカラノフはコルベ神父の作った「汚れなき聖母の町」でした。1九二七年、マクシミリアン・コルベ神父は、信仰誌「聖母の騎士」という雑誌を作っていました。その印刷所を兼ねた小さい修道院が、このニェポカラノフです。そして修道院長として命をうけてコルベ神父は働き、一九三〇年には日本に宣教のため来ております。長崎の大浦の天主堂での[illegible]は、日本語で「聖母の騎士」第一号を発行したことです。その後、一九三九年九月、第二次世界大戦が勃発し、たちまち全ヨーロッパは戦火にまきこまれ、ナチス・ドイツ軍が我が物顔でポーランド中を荒し、コルベ神父は一九四一年、ゲシュタポ(秘密警察)によって逮捕され、出版活動も停止されました。そして神父は、アウシュビッツ強制収容所に入れられ、若い人の身代わりとなって、自ら、十名の受刑者の列に加わり、第十一号の餓死室へ連れて行かれたそうです。

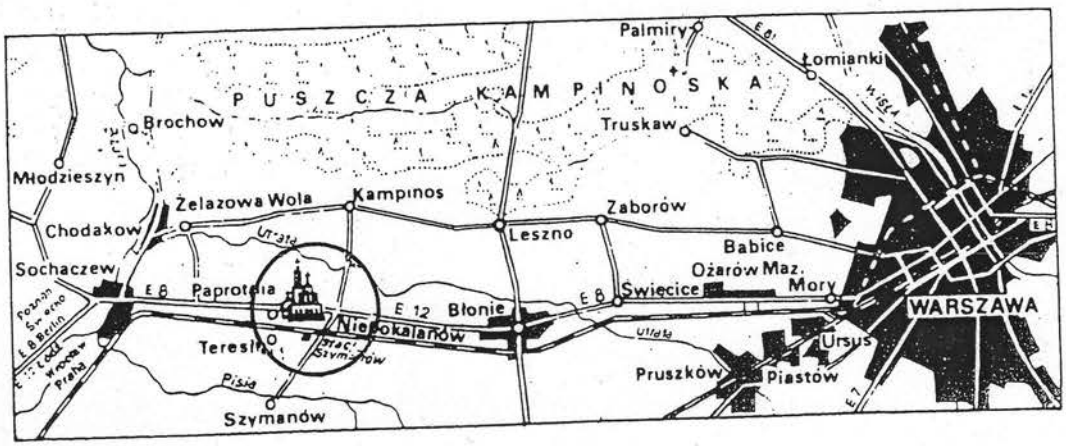
今回の旅でこの餓死室もみました。アウシュビッツ強制収容所を訪ねたとき、単に戦争の爪痕をみせるためではなく、アウシュビッツは愛と平和の大切さを教えるためにこそ残されたのだと思いました。数々の展示品を見た時、やりきれない気持ちになりました。コルベ神父は死を早める注射をされ息を引き取ったと案内をしてくれた方の説明に、石をのせられたように心が重くなりました。

「大きな歴史を持つ小さな町」アウシュビッツを訪れ、十三年前に横浜で見た映画とだぶり、今もコルベ神父の生きざまに心うたれております。

今回の旅の最後の日、自由行動で主人と私はワルシャワ在住の友人の案内でルブリンにあるマイダネック強制収容所を訪れる機会も与えられました。ここは、すべてが自然のままに残された博物館と言った方がいいほど、かつてあったままに保存されていて、アウシュビッツ強制収容所よりも、より深い感動を人間に与える場所だと思いました。人間の生命の尊厳がなによりも重んじられ、そして残酷で非人間的なことが二度とくりかえされてはならないと、二つの収容所を見学して思いました。これらの収容所に眠る人々が地の底で、今もなお、そのことを訴えているように感じ、今回の旅は単なる観光旅行ではなく、多くのことを私に考えさせる良い旅でした。

この原稿を書き終わった直後、毎日新聞の「余録」欄で一人のポーランド人の死を知った。その人の名はフランチシェク・ガヨブニチェク。この人こそコルベ神父によって生命を助けられた、かつての若い囚人であった。九十四歳の天寿を全うした。

この人は当時「見知らぬ人が、私のために自ら進んで命をささげる、これは現実だろうか」と自問したという。この記事を読み、コルベ神父の愛と死の意義をあらためて感動のうちに覚えた。



ポーランド旅行での想い出

大和田 りえ子

今回、悩んだ末に決めた初めての海外旅行でしたが、こんなに一日一日が貴重で、且つ想い出に残る12日間を過ごしたのは、生まれて初めてではないかと思いました。毎日がとても充実していて、感動したり、驚いたり、喜んだり、悲しんだり、単なる旅行に留まらず私にとっては大切な人生勉強になりました。

この楽しく、想い出深かった旅行の中から特に心に残っていることと考えると、全てが印象的でとても悩みますが、2つ程選んで書かせていただきます。

まず一つ目は、昔からポーランドと聞くと必ず憧れの気持ちで思い浮かべたショパン。その生家のあるジェラゾヴァ・ヴォーラへ、念願かなって行った時のことです。ジェラゾヴァ・ヴォーラとは「鉄のような意志」という意味なのだそうですが、ワルシャワから南西へ54キロ程行った田園地帯にあります。バスで向かう途中、まわりにはリンゴやむこうでシリフキと呼ばれるプラムのような果物の木などがある、きれいな畑が一面に広がり、遠くへ目をやると山が全然なく、地平線がはっきりと見渡せることに驚きました。美しい景色を眺めながら、ショパンもこのような風景を見ていたのだなあと思い、とても感慨深かったです。生家はしだれ柳のある池や、木々の生い茂る美しい森の中にあり、私達が訪ねた時もたくさんの人々が訪れていました。ショパンの生家がこのような静かで落ち着いた美しい場所にあり、ショパンを愛する人達が多く訪ねて来ることをとてもうれしく思いました。

二つ目に想い出に残った場所。それはとても悲しく、強い衝撃を受けたアウシュビッツです。アウシュビッツもジェラゾヴァ・ヴォーラと同じように、とてものどかな田園地帯の中にありますが、まわりの空気に暖かさはなく、ピンと張りつめたような冷たさを感じました。収容所の中には、あの忌まわしい事実を一人でも多くの人々に伝える為、ここへ連れて来られた人々のたくさんの写真が壁に並び、彼らの靴や靴墨、眼鏡や義足、櫛や鞄、そしてここへ来た時に刈ら[illegible]た信じられない程の量の髪の毛が、山のように保存されていました。鞄にはいろいろな住所や名前が書いてあり、あちこちから連れて来られたのがわかりました。私は大分昔に『アンネの日記』を読みましたが、まだその時はユダヤ人に対する想像もつかないような仕打ちを、よく理解できないでいました。そしてこの今回アウシュビッツを実際に訪れ、自分の目で恐ろしく、痛ましい光景を見て帰って来てから、もう一度あの本を読み返してみました。読みながら本に出てくる悲しく残酷な様子が、アウシュビッツで受けた大きな衝撃と重なり、胸がしめつけられるような思いでした。日記の中にアンネの言葉で「戦争が何の役にたつのだろう？何故人間は仲良く平和に暮らせないのだろう？」と書かれています。私もアウシュビッツ収容所を訪れて、切実にそう思いました。今でも世界のあちこちで争いが絶えないこの世の中を、とても悲しく思います。そして今回実際に自分の目で見て、本やテレビで知ったつもりでいた知識より、遙かに真実を知ることができたと思いますので、一人でも多くの人にアウシュビッツを訪れてほしいです。そして世界の人々が民族、人種、宗教を超えて人生について、平和について、戦争について深く考え、そこで人々が受けた苦しみを、二度と他の人々に繰り返させないようにするならば、悲しい運命に散った数多くの声なき犠牲者の霊も慰められるでしょう。

最後に嬉しかったこと、驚いたことなど少し付け加えると、一つ、とても安い旅費で済んだのに、宿泊したホテルは四ツ星以上で立派だったこと。食事はとてもおいしく、昼と夜はコース並だったこと。私は乳製品が大好きなのですが、ポーランドでは牛乳やヨーグルトは期待できないだろうと思っていたら、とってもおいしかったこと。ポーランドの犬は、散歩の時も首輪をつけられている犬など全くなく、きちんとしつけされていて、日本の犬とは比べものにならなかったこと。どんなに貧しそうな家でも、必ず窓際にお花を飾っていたこと。そしてウッジでの交歓会で特に思ったのですが、ポーランドの人々はとても心優しく、気持ちの暖かいことなどです。

本当にポーランドへ行けて良かったです。また機会があったら、ポーランドを訪れたいと思っています。今回のポーランド訪問団を計画し、御尽力下さった方々には、この紙面をおかりして心から御礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

ポーランドの旅を終えて

米光　幸子

一九九四年の春迄、札幌に住んでいた私は、幸いにもクリスチャンセンターの近くだったので、ハリーナ先生のポーランド語講習を受ける機会に恵まれました。なかなかモノにならないながらも、先生やポーランドを訪れる機会の有る方々の御話を耳にして、段々と憧れの気持ちが大きくなって行くのを禁じ得ませんでした。一寸だけどピアノを習った身でショパンは大好きな作曲家、そのポーランドのワルシャワは嫁の出身地ですから尚更のことでした。いつか北ポ協会で訪問の機会を作って下さると期待しておりましたが、主人の定年に伴い岡山に移り、それでも懐かしい北海道の皆様と旅が出来ることを心待ちにしていたのでした。

ポーランド語講習を受けた第一の目的、息子達の結婚式でポーランド語で交流出来ること、が実現した後、第二の目的も又実現することを疑わず待っていた甲斐があり旅行に参加した時、心の奥底にあったものは観光気分というよりも、あの広島を訪れた時に感じた一種の巡礼的な贖罪的なアウシュビッツをこの目で見て、反省したい様なそんな気持ちだったと思います。人間の神を畏れぬ愚かな行為は今も後を絶つことが無く、世界中で、この日本でも起こっていることを考えると、本当にいたたまれぬ思いです。過去に有ったことを伝えてゆく事の大切さをつくづく思わされた[illegible]でもありました。

街角に残る、ポーランドの人々がここで何人ナチスに処刑されたというような碑も、ゲットーの跡も、黄金の秋の抜けるような青空と明るい人々と対照的に、この国の人々の永い苦難の歴史を思い起こさせるものでした。

最近当地の新聞の記事で、広島県福山市に「ホロコースト記念館」が出来ることを知り、意を得たように感じたのは私だけではないと思います。アンネ・フランクの父との出会いから始まって証言や[illegible]料を集め、今では二十数カ国の五百点を超す資料が得られ、開館記念式が六月十八日に行われるとのこと、聖イエス教会の一牧師の努力の結晶です。アンネの友人リース・ピックさん、ホロコースト研究の権威、米国ニューヨーク市立大のランドルフ・プラハム名誉教授などの記念講演と共に、七月一日からの一般公開では、ノーベル平和賞作家、エリー・ウィーゼル氏や「シンドラーのリスト」に載っている人からの手紙、ナチスの強制収容所で書かれたユダヤ人の詩や遺品、写真などが展示される予定です。これは日本で始めてのことなのだそうです。

さてポーランドへの旅は、もう一つの反省の旅ともなりました。如何に私が物質文明におかされているかという事をつくづく感じたのです。挙げればきりのないことですが、例えば素朴なりんごの味にハッと思ったのでした。今年の大震災で多くの日本人には同じ思いを感じた方も少なからずいらした事と思いました。

ワジェンキ公園の印象的なショパン像と、その足元でのピアノ演奏を聴いたこと、ヤスナグラの文字通り輝く夕陽と教会のミサ、ザコパネの古い教会や露天市場、スターレ・ミヤストの建物や広場、交流会での出会い、何もかも素晴らしい経験でした。

又素晴らしい方々との出会いの旅でもあり、あの時のメンバーの方々と交流の機会があるということで、出来れば参加させていただきたいと思っている所です。四月二十九日の当地の新聞記事にそのお一人の方のお名前を発見、御紹介させていただくと：赤磐郡赤坂町はユニークな「絵本によるまちづくり」を進めている町ですが、読書公園の開設一周年記念に、園内のアトリエで個展を開いた。豊かな子どもの心を育てようというのが目的で、「文化には値段はつけられない」と入場料無料。国連のユニセフ賞も受賞したスロバキアの挿絵画家、ドウシャン・カーライさんを紹介したのが町委嘱の「絵本の大使」で東欧の芸術に詳しい森ヒロコ・スタシス美術館の長谷川洋行館長である、という記事です。旅行中、バスの中で、ホテルの食堂で傾けて下さった数々のウンチクを思い出しているところです。「不思議の国のアリス」の絵本原画など二百二十点を是非見に行きたいと計画中です。

すべての子供が豊かな心をもって育つよう、ホロコーストなど二度と起きない世の中になるよう祈りながら…。

ショパンの巣

三浦　洋

ポーランドの旅から瞬く間に半年が過ぎましたが、楽しかった思い出は鮮やかさを増すばかりです。こうして机に向かっていても、ショパンの生家があるジェラゾヴァ・ヴォーラへ向かう途中に眺めた田園風景が目の前に浮かんできます。ワルシャワ郊外に出ると、辺りはたちまち地平線が見えるほどの平野になります。そこにはただ畦道だけが、ミツキェヴィチが「リボンのように」と形容した様子で、緑と茶色にいろどられた畑を十字に走っていました。

こんなふうに旅の思い出を書き出すと、いくらページがあっても足りませんので、ここではワルシャワでショパンゆかりの場所を訪ねた体験のごく一部だけを記すことにします。

ショパン・ファンなら、ワルシャワの「クラコフスキェ・プシェドミェシチェ通り」の名前を覚えておかれた方がよいでしょう。この舌をかみそうな名前の通りこそ、ショパンが生後七カ月ほどから二十歳までを過ごし、人間形成をとげた故郷の懐に他ならないからです。

旧市街（スターレ・ミャスト）の入り口にあるジグムント王柱から聖十字架教会までの約一キロメートルの界隈が、クラコフスキェ・プシェドミェシチェ通りです。今回、実際に踏査してみて、この一キロメートルを直径とする円内にショパンに関係のある建物のほとんどが入ることに気づきました。ショパン一家が住んだ三軒の家（そのうち、サスキ公園にあった最初の家は今はない）をはじめ、八歳のショパンがデヴュー・コンサートを開いた場所や、ショパンがよく行っていた喫茶店などがこの円内に収まるのです。ちなみに、二軒目の家はワルシャワ大学のアジア研究所の棟になっていますし、三軒目の家は美術大学の建物です。この二つの建物と、ショパンの心臓だけが帰ってきた聖十字架教会とは、まさに「向こう三軒両隣」の位置関係にあります。

このクラコフスキェ・プシェドミェシチェ通りの界隈は、十九世紀の詩人ノルヴィトが「ショパンのピアノ」という作品の中で、ショパンに呼びかける形で「君の巣（グニャズド）」と表現した場所です（残念ながら、ノルヴィトの作品の邦訳はありません）。私にとって、ショパンの「巣」を自分の足で訪ね、この界隈の空気を肌で感じ、この界隈の人々の表情をつぶさに見ることができたことは、無上の喜びでした。おまけに、旧市街で開かれていた青空古本市、といっても、小さな棚に古本が無造作に並べられていただけです

ジェラゾヴァ・ヴォーラのショパンの生家で

が、そこで私はノルヴィト作品集のポーランド語ーフランス語対訳版を見つけました。首都ワルシャワの雑踏のただ中で、眠っていた宝物を見つけたような気持ちでした。

宝物と言えば、帰国する前夜に聴きに行った小さなピアノ・コンサートは、生涯忘れ得ない私の宝物のような体験になりました。会場は旧市街の一角にある歴史博物館の三階です。新聞には「夜七時開演」と出ていたので夕食後あわてて市街電車に飛び乗りましたが、行ってみると八時からでした（！）。歴史博物館の企画だからなのか、ポーランド音楽の歴史を時代順にたどるシリーズ・コンサートの一つで、たまたま当夜のプログラムは「ショパン以前の音楽」と題されていました。女性らしい夢見るような旋律が続くマリア・シマノフスカの作品や、「ポロネーズの王」と呼ばれるオギンスキの哀切な曲が胸にしみました。とくに、「祖国よ、さらば」の名で知られるポロネーズの美しさをあらためて感じました。ワイダの映画「灰とダイヤモンド」のラストで悲しげに鳴り響く曲です。また、ショパンの師の一人であるエルスナーの作品を生演奏で聴く機会は、これが最初で最後ではないかと思いました。モーツァルトの美しい旋律だけを集めて歌うようなエルスナーのソナタに接したとき、「歌う心」こそ、ショパンがこの師から学んだ最大のものだと確信しました。演奏したのは、マリア・コレツカ・ショシュコフスカという中年の女性ピアニストです。もちろん、演奏後すぐにサインをもらいに行きました。なんと素晴らしいピアニストが知られないでいるのだろうか、と思いました。

私はさらにショパンの「巣」を歩きながら感慨に耽りました。ああ、あれが、ショパンが終生持っていたアルバムの表紙に描かれていたジグムント王柱だ……あの建物の四階がショパンの部屋で、二曲の協奏曲をはじめ、ポーランド時代の彼の珠玉の作品がここで生まれたのだ……この建物に住んでいたとき、ショパンの妹エミリアが結核で、わずか十四歳で亡くなったのだ……。百六十四年前の秋、ショパンが旅発った街角に立った私は、とめどなく天才の生涯を追想しました。

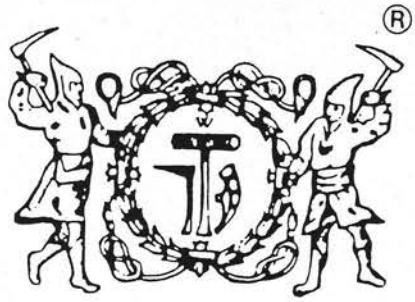
聖十字架教会に入って左のところにショパンの心臓が埋められた記念柱があり、ショパン像の顔は旧市街の方を向いています。青春の日、彼が愛したクラコフスキェ・プシェドミェシチェ通りの風景を、今も彼はここから見ているのでしょう。「心があるところに、宝もある」。ショパン記念柱に刻まれたマタイ福音書の一節は、ポーランド人の篤い信仰心とエスプリが結晶した美しい碑銘になっています。ショパンの心が、彼の宝である祖国に今あるという意味でもふさわしい句ですし、ポーランドの宝であるショパンの心がそこにあるという意味でもふさわしい句でしょう。そして、地球の裏側に住む私の宝も、今ではクラコフスキェ・プシェドミェシチェ通りにあります。これからずっと、私の心がショパンの「巣」を離れようとしないからです。

〜〜〜〜 参加しませんか 〜〜〜〜

ポーランド文化協会の修学旅行

とき	9月30日（土）〜10月1日（日）
ところ	池田町 キャンプ場のロッジに泊まります。
目的	秋の池田町を訪ね、10月1日のワインまつりに参加します。夜は地元のポーランドファンとの交流をはかる。
費用	ロッジ泊　4,000円、他に飲食代、交通費
募集人数	15人程度

詳細は追ってお知らせします。参加ご希望の方は早目に事務局まで意志表示をお願いします。



岩塩を掘る坑夫の服装の図

塩の来た道
―ヴィエリチカの伝説より―

栗原　成郎

ヴィエリチカの岩塩坑見学は今回の旅行日程のなかで唯一のオプショナル・コースであったが、一見の価値ありということで、全員参加することになった(費用は一人十七ドル)。クラクフ滞在中の、オシフィエンチムを訪ねた日の夕方に組まれた日程で、いささか強行軍の感はあったが、全行程専用マイクロバスで移動という便利さのおかげで、短い時間を無駄なく使うことができ、楽しい見学旅行となった。

ヴィエリチカはクラクフの南東十三キロの地点にある人口約一万八千の町で、現在はクラクフの"ベッド・タウン"と化しているが、ヨーロッパ有数の岩塩の採掘場として知られている。ここの岩塩は十三世紀の末から本格的に採掘されはじめ、いまはほとんど掘り尽くされている。塩の採掘と販売は王の管理のもとにおかれ、塩は王室財源の三分の一を占めた。中世クラクフの繁栄を支えていたのはヴィエリカの製塩業であった。

坑道は、長さは全部合わせると二百キロにおよび、深さは三二七メートルで九層から成る。上部三層の採掘跡は地下博物館となっていて、一般に公開されている。

私たちを案内してくれた博物館の係員は、三十年坑夫として働いたというベテランで、端正な顔立ちの小柄の老人だった。岩塩坑のことならなんでも知っているという感じで、説明も簡にして要を得ており、こちらの質問にも的確に答えてくれた。

ベテラン坑夫の説明のなかにはヴィエリチカの塩にまつわる伝説が含まれていて、私の興味をひいた。それをここに紹介する。

(一) キンガ王女の持参金

中世のある時期までポーランド人は、食卓につく時はいつも悲しげな顔をして、料理が味足らずなのを嘆いていた。ポーランド人は塩というものを知らなかったのである。

十三世紀のこと、ポーランドのボレスワフ王は、ハンガリー王ベーラ四世には敬虔で美しい娘がいることを知って、求婚のため二人の使節を派遣した。ハンガリー王は娘のキンガ姫をポーランド王に嫁がせることにした。キンガ姫は、ポーランドには塩がないということを知って、ポーランドに塩を贈りたいと思い、持参金の一部として塩を加えてほしい、と父王に願った。ベーラ四世はハンガリー領マーラマロシュの岩塩坑を娘の持参金目録に加えた。キンガ姫は霊感が働く人であった。姫はその岩塩坑に赴き、「ポーランド王との婚約のしるしとして」指から指輪をはずして縦坑の底に投げこんだ。

ハンガリー王女の嫁入りの行列はクラクフをめざして出発した。結婚式が終わり、ポーランド王妃となったキンガはすぐに霊感に導かれて、王と随員を伴って、クラクフ近郊の寒村ヴィエリチカに赴いた。

王妃の命にしたがって村人が地を掘ると、ほどなく堅い岩盤にぶつかった。王妃は働き人に岩を砕かせ、その塊を渡すように命じた。その岩の塊は塩の結晶であることが判り、しかもその中にはキンガの婚約指輪がはいっていた。このような摩訶不思議な方法で塩はポーランドにもたらされた。

キンガ王妃はポーランド国民の敬愛を集めた。キンガはベスキド山地のスタールイ・ソンチに清貧の聖クララを記念する女子修道院を建立し、生涯の最後の日々をそこで過ごした。キンガ王妃は教会によって聖者の列に加えられた。ヴィエリチカの壮麗な地下の礼拝堂は「聖キンガ」の名を冠している。

キンガ王妃による岩塩坑の発見

（二）スカルブニックの話

ポーランド語のskarbnik（スカルブニック）はふつう「会計係」、「金庫番」の意味であるが、民間伝承では地下の埋蔵資源の守護神のことであり、ネズミや白い長いひげの小人の姿をとって坑夫たちの前に現れる。

昔、アンテックという名の若い坑夫がひと仕事終えて休憩し、弁当のパンとチーズを食べていると、小さな灰色のネズミが彼の足元に現れた。ネズミが人を恐れる様子もないのを見て、アンテックがパンのかけらを差し出すと、ネズミは彼の手からそれを食べた。すると、驚いたことに、ネズミは小人に変わった。小人は食べ物のお礼を述べ、坑夫に、もし稼いだ金の半分をくれるなら、仕事を手伝ってやる、と言った。アンテックは、相手がスカルブニックだ、とすぐに分かり、小人の条件を受け入れた。小人はただちに坑夫をとある廃坑へと案内した。廃坑の奥には純粋な塩の結晶の岩壁があった。坑夫が驚いている間に小人の姿は消えていた。

なん日もの間、アンテックはせっせっと岩を掘りつづけた。仲間の坑夫たちは羨望の目でアンテックを見た。坑夫の多くはアンテックよりもはるかに経験を積んだ者たちであったが、このように大きな塩の岩棚を発見する幸に恵まれた者はいなかった。坑夫たちのなかには、アンテックが悪魔と取り引きをしている、と陰口をたたく者もいた。しかし若い坑夫は誹謗や中傷を物ともせず、唇をかみしめて一心不乱に働いた。そしてネズミがそばに現れるたびにネズミに弁当を分け与えた。

一週間が過ぎ、若い坑夫はその働きに応じた巨額な賃金を受け取った。坑夫たちは居酒屋に飲みに出かけたが、彼はその仲間に加わらなかった。彼は仲間が全部帰っていくのを見とどけて、自分の坑に引き返した。

スカルブニックはそこで待っていた。彼らは金を山分けにしはじめたが、硬貨の数が奇数であることが判った。アンテックは半端になった最後の一枚の硬貨をスカルブニックに与えた。小人はアンテックを見てにっこりと笑い、以前にもたくさんの坑夫たちを試してみたが、最後に残った硬貨の一枚をほしがらなかった人間はアンテックが初めてだ、と話した。そしてスカルブニックは若者に金を全部与え、家に持ち帰って有益に使うようにいった。スカルブニックはアンテックに、困ったことがあればいつでも助ける、と約束した。

アンテックは自分の家を建てて、美しい妻を娶った。彼は大金持ちになったにもかかわらず、岩塩坑で働きつづけ、貧しい人々をいつも助けたという。

ポーランド旅行の思い出

藤平　隆

1．〈ポーランドへの恋〉

学生時代の2年の時か、3年の時か定かでないが、ポーランド映画に出会った。このころよく映画を観ていたが、この出会いが、どうして起こったのかもよく思い出せない。最初の映画は『灰とダイヤモンド』だったと想う。いや『夜行列車』だったかもしれない。その後も『地下水道』や『影』、『尼僧ヨアンナ』など意欲的に観たものだ。これらのどの映画からも新鮮で強烈な印象を受けたものだ。映画だけでなく、小説への世界へも興味をそそられて『現代東欧文学全集』（恒文社）のポーランドの6，7，8巻などを読んだり、歴史書を読んだりして、ポーランド映画に魅せられただけでなく、ポーランドそのものに熱い恋心を抱くはめになったのであった。

そんな時代から、すでに30年余りの歳月が流れたが、その恋心に起伏はあったものの、冷めることなく現在まで保たれてきたのである。こんなことだから、ことあるごとにポーランドのことを語るので、「藤平はなんであんなにまでポーランドに関心があるのか」と不思議がられる存在（？）にまでなってしまった。そんなことを聞かれると、学生時代の映画の話からはじまって、どうしてポーランドか、と長々と説明をはじめるのだった。

2．〈北海道ポーランド文化協会との出会い〉

田舎の池田から札幌へ出て来ても、スナックや居酒屋でもポーランドについて話するものだから、そのうちに北海道ポーランド文化協会の一会員と会う機会に恵まれ、即座に入会することができた。そして、ポーランド行きが実現することになった。

夢にまでみたポーランド旅行で、強く印象に残った一部を以下手短に誌すことにしたい。

3．〈ワルシャワ蜂起記念碑・一輪のバラ〉

ナチス・ドイツに対するポーランド人の誇りをかけた絶望的なワルシャワ蜂起を記念する一群の彫刻の中に、兵士が小さな子どもを小脇に抱えて前進しようとしている像がある。その子どもと横の兵士との間の狭い空間を利用して、一輪のバラがさし込むようにして献ぜられていた…。

ワルシャワ
文化科学宮殿頂上からの眺望。
右側のマッチ箱状の建物がホテル・フォルム。
上方は市内を流れるヴィスワ川。

4．＜ニェポカラノフの修道院＞
　アウシュヴィッツでの餓死の刑を宣告された青年の身代わりとなって獄死したコルベ神父を記念する博物館（教会）を訪ねた。ガス室による大量殺りくと餓死の刑のアンバランスさには不思議な思いがする。コルベ神父は長崎で宣教していたことがあって、その当時の日本の生活用具などが多数展示されていた。

5．＜すばらしきポーランド女性＞
　帯広と札内に来たことのあるヒエロフスカ・クリステーナさんに会うことができた。帯広の個展の会場で会って、短い時間だったが、池田などを案内することができた。私が初めて直接会話をすることが出来たポーランド人だ。彼女はエッチング作家で、『ポロニカ』創刊号でも彼女の作品が紹介されていた。今後活躍を期待される有望作家なのだろう。
　世界的に著名なチェンバリストのエリザベータ・ステファンスカさんにも会うことができた。数カ月語の11月に池田町田園ホールで彼女のリサイタルを開催することになっていたので、その話をしていると大竹貞さんが、「良く知っているので、行ってみましょう」ということになって、お会いすることができたのだった。通訳の吉田さんを介して楽しい会話の時間をもった後、再会を約してお別れした。池田で再会した時のことはまた別の機会で。
　小林暁子さんの友人のカーシャさんにもアンバーの買物や観光案内をしていただいて、ポーランドでの思い出を豊かなものにしていただいた。同じ名だが通訳のカーシャさんも理知的な女性で、私たちの旅行を一段と内容豊かなものにしてくれた。

6．＜オペラ劇場と文化科学宮殿＞
　ウッチで短時間であったが、オペラ劇場の内部を見ることができた。分厚い板と無造作に補修されたステージ、それに奈落の[illegible]に深いオーケストラピット、一千名以上収容できる固定席。オペラを観たかったが、シーズン前で不可能。あのワルシャワの悪名高きスターリンからの贈りもの、文化科学宮殿の奥深くにある小劇場で長谷川洋行さんの友人で、ポーランドのスーパースターであるスタシスさんの自作自演の演劇を鑑賞する機会に恵まれた。彼のこれまでの半生を演劇化したものだという。直前の席でスタシスさんの母親役をした女性が「ポーランド語は？。ではフランス語は？」と気づかってくれた。どちらもだめなので会話は出来なかったが、楽しい雰囲気を味わうだけで充分だった。

7．＜グダンスクへの一人旅＞
　ザコパネからチェンストホーバへ向かう途中、クラコフ空港で一行と別れてグダンスクへと飛んだ。ポーランドへの熱を再燃させた〔連帯〕の発祥の地を是非みてみたいと思ったので。
　旧レーニン造船所や連帯のメンバーで闘いの過程で倒れた牧師や活動家をまつる教会にも行くことができた。
　ドイツ人の手によってつくられたこの街ダンツヒは、復旧された旧市街にその特徴が良く現れていて、直線的な街並みが印象的だった。ソポトは小雨に煙っていたが、すばらしいロケーションだった。市内の運河も…。

私とカーシャのグダンスク

小林　暁子

訪問団の他のメンバーが帰国の途につく九月十四日の早朝、私はワルシャワに住む友人カーシャと共にノンストップの特急列車でグダンスクに発った。汽車はコンパートメントの一等車で、乗客の姿は一等車にはほとんど見られなかった。駅で朝食用のサンドイッチを買ったが、汽車は朝食つきだった。

カーシャは彼女の絵本出版の直前で多忙な中を、私のために二日の休暇をもらって同行してくれたのだ。私は彼女への感謝の気持ちをこめて、海の見える素敵なホテルに泊まることにしようと心に決めていた。

グダンスクの駅に下りて、さて案内所はないかと広場へ歩き出したところへ、長いコートを着て半白の髪をひっつめにし、ぶ厚い眼鏡をかけたやせた中年の女性がカーシャに話しかけてきた。カーシャは何か断り、私たちは歩き出したが、その女性はなおもついてきて早口で一生懸命話してくる。カーシャは困ったように「自分の家に一泊千円で泊まらないかといっている」という。その女性の雰囲気から、行き先は余り良いところではない、という感じがして、私は「ホテルに泊まりたい」といった。

その女性はなお行く手をふさいで、「部屋も清潔だしシャワーもお風呂もついている」という。こんどはカーシャまでが「この人は悪い人じゃなさそうだし、値段もまあまあだ。どこが気に入らないの」というので、道端でさそわれたことや、千円という値段が安すぎて心配、などとは言えず、見てから返事をすることにしてタクシーでその家に行った。

着いてみると思っていたよりずっと貧しい感じのブロック二階建てのアパートで、家の前には低い垣根が続いており、玄関の前には一戸ごとに小さな木戸がついていた。

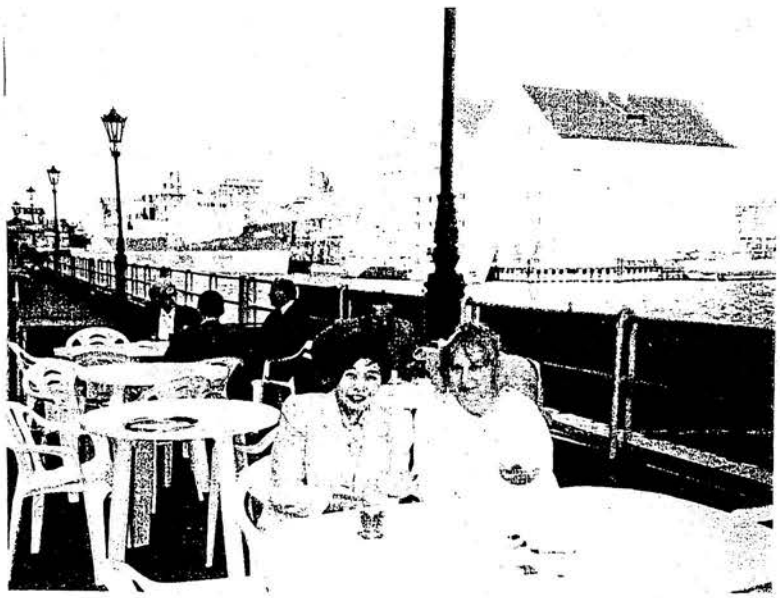
その女性は二階に住み、一階の二部屋と台所兼食堂と浴室を旅行者に貸して、年金生活の足しにしているということだった。

部屋の中は殺風景で、ベッドが二つ、ビニールクロスをかけた円いテーブル、椅子二つ、古い洋服ダンスと、何も入っていない戸棚、その上の一輪ざしには赤いホンコンフラワー。部屋の片隅にあるタイル貼りの背の高いストーブだけが少し興味をひいた。

食堂は寝室より二まわり程小さく、小ざっぱりしていた。となりのもう一つの部屋にはドイツ人の女性が入っているということだった。

気になっていた浴室を見た時、ああ、これはダメだと思った。穴蔵のような小さな部屋に大きな浴槽とトイレ。それらは一生懸命磨いているらしかったが、金具もタイルも古い古いもので、水の出も悪かった。

断る言葉を探して「トイレが」「水が」といいかけたが、真剣に見つめる女性の目に、悪い返事は出来なかった。「これはポーランドの、貧しいけれど普通の家よ。それにここはほんとに寝るだけ」というカーシャの言葉で私はここに泊まることに決めた。



その女性のうれしそうな顔と、すぐ持ってきた古いけれど洗濯したてのシーツを見て、ここに泊まらずにきれいなホテルに行ってしまったら、ポーランドの人々の普通の生活を知らずに終わってしまうところだった。日本を発つ前に希望していて叶わなかったホームステイが今、形を変えて実現するのだ、と思った。

あとでベッドは作っておきます、といって玄関と寝室と台所のカギを渡されたが、カーシャは心得たもので、ちゃんと開閉できるかやってみて、という。実際カギはどれも磨滅していてなかなかうまくいかなかったが、部屋を断られやしないかと心配しながらカギを開閉してみせる女性が何ともいじらしかった。

私たちはタクシーを乗り継ぎながら、オリーヴァの大聖堂でパイプオルガンの演奏をきき、美術館を訪れ、ソポトの町では白い砂浜に長く突き出した遊歩道桟橋を歩き、バルト海の潮風に吹かれておしゃべりをした。

そのあとソポトの町にカーシャの友人をたずねた。その友人は突然行ったにもかかわらず、気持ちよくグダンスクを案内してくれた。私は、ワレサら連帯の仲間たちが立て籠もった教会に案内してもらった。夕方

の礼拝が始まっていた。そのあと暗くなりかけた旧市内をゆっくり散歩し、その友人が設計したという旅行案内書にも出ているシーフードの専門店に案内された。地元の人でも「この前食べたのは十年前だったかな」という程高価だが、おいしいという魚を勧められた。八年前札幌でカーシャがお世話になったお礼だ、とその友人は言った。

十一時頃その友人に送られて帰ってきた。家の前に車をとめ、木戸を入ると、その友人はカーシャと自分のタバコに火をつけ、去りがたいように車に寄りかかった。二人で何か低い声で話し合っている様子には、映画のシーンのような素敵な雰囲気が漂っていた。

突然、棟続きの隣の家の二階の窓があいて、「うるさい。今何時だと思っているんだ。とっとと帰ろ」という声がとんできた。言葉はわからなかったが、私にはそう聞こえた。

それを潮に私たちはサヨナラをいって家に入った。家主の女性はカギを開け、階段の途中に立って待っていてくれた。

私たちは疲れていて、翌朝目が覚めたのは十時半。身支度をして十一時にはその家を出た。家を出るとき

その女性はコートを着て玄関で待っていた。私たちのあとに入る次の客を駅に拾いに行くために。

私たちは聖エリザベス教会の中の見事な美術品のコレクションを見たあと、昼間の旧市街を散歩し、港のレストランで食事をした。その時カーシャは、昨日の友人は八年前に別れたポーイフレンドだ、と言った。

ポーランドの物価

昨年末のポーランド週刊新聞「ポリティカ」に生活物価一覧が載っていましたので、その一部を円に換算、表示します。我国の物価と比較してみましょう。

パン・肉・果物・コーヒーなど食料品・嗜好品や映画、公営交通料金などは驚くほど安いが、電化製品は札幌とそれほど違いがないようだ。

体制変革後、チェコ、ハンガリーとともに旧ソ連・東欧圏でトップを走っていると言われているポーランド。昨年の所得水準は変革前の水準を越え始めたようだ。国民経済の低ドと混難が続く国が多い中で、ポーランドに於ける変革後の着実な成果を垣間見ることができる。

なお、新年からの一万分の一のデノミ実施、旧一〇,〇〇〇ズウォティが新一ズウォティとなり、グロシュ（百分の一ズウォティ）が復活した。

（富山信夫）

品物	市価(1994) 単位	円	月収で購入できる量 '94	(参)変革前('86~88)
パン	0.8kg	39	622	655
牛乳	l	26	938	1,224
バター	250g	76	321	209
砂糖	kg	56	436	275
牛肉骨付	kg	240	102	109
豚ロース	kg	368	66	49
ソーセージ	kg	200	122	171
馬鈴薯	kg	24	1,017	1,004
リンゴ	kg	50	488	288
オレンジ	kg	92	265	47
コーヒー	100g	92	265	65
ウオッカ	0.5l	342	71	26
チョコレート	100g	56	432	106
美容室	回	720	34	58
紳士服	着	11,200	2.2	2.4
冷蔵庫(280l)	台	42,400	0.6	0.6
カラーテレビ(21型)	台	34,400	0.7	0.1
映画		200	122	77
新聞		40~48	560	2,185
市営交通		12~24	1,525	2,532

[注] 1ドル(100円)＝24,400ズウォティ として円に換算

ガイドブックの紹介

ワルシャワリビングガイド
ワルシャワ留学生・研究者グループ 編集
―一九九四年・夏

このガイドブックは、ポーランドの概要にはじまり、留学の準備、入国の手続き等のこと、そしてポーランドで生活するために必要な日常的なこまごましたことを網羅しています。

書店で入手することはできませんが、関心がある方は事務局にお問い合わせ下さい。

「ポーレ」編集委員会
斎田道子・清水保子
吉田　宏
〔連絡先〕621-1738（斎田）

POLE 第 30 号（1995.5.24）目次

ポーランド感動の旅（1994.9.5～15）～訪問団参加者報告集…… 1
小笠原正明「豪華な顔ぶれのツアー」…… 2
栗原朋友子「大きな歴史を持つ小さな町」…… 3
大和田りえ子「ポーランド旅行での想い出」…… 4
米光幸子「ポーランドの旅を終えて」…… 5
三浦洋「ショパンの巣」…… 6
池田町修学旅行（1995.9.30～10.1）の案内…… 7
栗原成郎「塩の来た道～ヴィエリチカの伝説より」…… 8
藤平隆「ポーランド旅行の思い出」…… 9
小林暁子「私とカーシャのグダンスク」…… 11
富山信夫「ポーランドの物価」（「ポリティカ」誌より）、新刊紹介「ワルシャワリビングガイド」…… 12